

# テヘラン「相続」考

岩 崎 葉 子

人間誰しも老いる。専ら事業に刻苦勉励した  
壮健な現役時代を過ぎれば、いずれ来し方の蓄  
えを後に残る者たちに受け継がせるべき時が来  
る。

## ◆◆◆◆ サラーイ・ダール ◆◆◆◆

遺すものは現金とは限らない。テヘランの大  
バーザールには、目抜き通りに店を張る商人た  
ちよりももっと手堅い財産を遺せる人々がいる  
という。「サラーイ・ダール(sarāy-dār)」と呼ば  
れる人々だ。

大バーザールの古老はある日、店の中に発送  
を待つ地方向けの荷物がうずたかく積み上げら  
れているのを眺めながら、言った。

「夜にはこれがおもての通路に並べられます。  
ええ、地方へ送るんでね。ここにはサラーイ・  
ダールというのがいて、連中はダンボール箱ご  
とに、80トマン、100トマンなどと、大き  
さに応じて店主から取るんです。」

すべての店が閉まってしまう夜の大バーザ  
ールでは、ダンボールに品物を詰めて店の前に出  
しておくと、ダールン(dālān)などと呼ばれる  
通廊ごと、街区ごとに雇われたサラーイ・ダール  
が責任をもってそれらを運送会社に発送委託す  
るという。これがもし買い手の手元に届かなか

ったら、それはサラーイ・ダールの責任である。

彼はこの他にも、夜警の役割の見返りに各商  
店から月極め料金を徴収している。店によって  
多少額は異なるが、ひとつのダールンにたく  
さんの店舗が並んでいるので全体としてはかな  
りの収入になるという。サラーイ・ダールは本  
人と彼の雇い入れた数名が組になり、無人の大  
バーザールにいつ忍び込むとも知れない悪漢に  
そなえて、夜通し交替で見張りをするそうだ。

「サラーイ・ダラー(サラーイ・ダールの職)は、  
ある種の特権になっていましてね。もし今誰か  
がここのサラーイ・ダラーを買いたいと言え  
ば、3000万トマン、4000万トマン、あるい  
は5000万トマン(およそ630万円).....と言  
うのも、サラーイ・ダールはここにひとつ店を持  
ってるのと同じくらい収入がある。市況が良く  
て品物が売れるほど、連中の実入りも良くなる  
わけですから.....特権化しているので、売買の  
対象になる。」

サラーイ・ダラーを他人に売却する際には、  
ダールンの建物の所有者のみならず、管轄内  
のすべての店舗から同意を得なければならない  
という。

「もっとも彼らは絶対に売りませんがね。私た  
ちのサラーイ・ダールは、その父親もサラーイ・  
ダールでしたよ。サルゴフリーがあるんです。」

この特権はいつの頃からか、世襲相続の様相を帯びているらしい。

筆者もテヘランでのフィールド調査の折々に、商人たちやその家族から相続問題について漏れ聞くことがある。いったい何を遺して何を遺すべきでないか。相続はあたかも被相続人の人生美学を映している。

◆◆◆◆ ◆ サルゴフリー ◆◆◆◆

先の例のようにイラン人は、職業上の特権などを指して「サルゴフリーがある」と表現することがままあるが、本来の「サルゴフリー(sar-qofli)」とは商業施設の店子に認められる独占的な占有・使用权のことだ。

イランの商店は一般に賃貸物件であって、店子である商人は店の所有権ではなくこのサルゴフリーと呼ばれる権利を地主から買って商売をしている。サルゴフリーの値段は、それが繁華な商業地であればあるほど、所有権を買ったのほとんど変わらないほどに高い。ある商人が長年にわたって勤勉に店を切り盛りし、相当の顧客と商売上の名声とを得ている場合には、それが反映してサルゴフリーの値段はいっそう高くなると言われている。

さてこの商人が亡くなり、彼にたとえば、幼少期から父親のもとで商売の手伝いをしてきた息子がいれば、息子はこのサルゴフリーを相続することができる。そうして、そのまま二代目として営業を続けるのである。

複数の子どもがいる場合はどうか。息子が3人いたとしよう。3人のうち1人だけに商才があり、他の子どもたちは商売をやる気がない場合には、1人が兄弟から彼らの取り分相当(この

場合は3分の2)のサルゴフリーを買い取る格好になる。3人が3人とも商売をやりたい場合には(それほどよくある事例ではないが)、1個の店のサルゴフリーは分割できないから、それは彼らの共有(moshā')となる。同じ店で同じ商売を、協力してやっていく。

タブリーズ出身の絨毯商アリー氏は、先ごろ商売の一線から退いた。アリー氏は大バーザールの店のサルゴフリーをいずれ長男と次男とが相続することを見越して、仕事を2人に任せることにしたのである。十分な資産とともに老後の不安もなく、豊かで安穩な隠居暮らしと思いきや、意外にもアリー氏は憂鬱である。

アリー氏自身は、自分の弟と2人で上京して事業を興し成功した。しかしこの弟とはその後、仲違いして袂を分かった経歴を持つので、今後の息子たちの共有事業に困難がつきまとうであろうことを予想しつつ暗澹としている。憂鬱の原因はそればかりではない。アリー氏は今でも毎日大バーザールに足を運ぶが、顧客や帳簿の管理のために導入されたコンピューターの使い方は彼にはいまひとつ分からないし、インターネットを通じた宣伝が絶大な効果を上げているらしいことも、息子から断片的に聞かされるばかりだ。店に出て馴染み客の相手をするものの、商売はすでに息子の流儀に変わりつつある。

すぐ近所に住んでいる息子たちがめったに実家へ顔を出さないことを気に病みながら、「彼らには彼らの生活がある」「あとは早く私たちが死んで、残りの財産をもらおうと考えていないことを祈るよ」とこぼすアリー氏は深い疎外感の中にいる。

アリー氏のように成功した商人や事業家が自分の稼業を子どもにそっくり継がせることがは

たして賢明か否かは、そもそもひとつの大きな問題であるようだ。

◆◆◆◆ ◆◆◆◆ **故郷のために** ◆◆◆◆ ◆◆◆◆

築いた資産を自分の身内に譲ることだけを考えているとかえって頭痛の種が増える、と考える人もいる。イラン北西部の寒村出身である事業家のモハンマド氏は、先ごろ、テヘラン郊外での大きな「ホセイニーエ(hoseiniye)」建設に着手した。彼の構想では、ここは単にホセイニ殉教を悼むシーア派の宗教行事会場としてではなく、在テヘランの同郷者たちが集い、あるいは短期で上京してきた者たちが簡易宿泊所として使用できるような、いわば「県人会館」のような公共の施設として建てるのだという。

「1階が大集会所、2階が男性用、そして3階に女性用の部屋がある。良いでしょう、ほんの少しの使用料を払ってもらえば、あとは自由に使ってもらって良い。ときにはテヘランに出てきている連中が田舎から親戚を呼んで、みんなでしばし懐かしく……そうか、だったら家族用の個室もあるかな！」

モハンマド氏は楽しそうに計画を語った。彼はテヘランへ出てきて30年余り、繊維関係の卸売業から身を興して、今ではビル・オーナーになり、着々と資産を増やしている。4人の子どもにも恵まれ、息子たちには稼業を継がせることも視野に入れている。しかし彼は、自分の稼ぎ出した一切切切を子どもたちに遺すことは考えていない。ホセイニーエ建設計画は数人の仲間と共同でやっているそうだが、ほとんどの資金を彼が拠出しているらしい。事務所の壁に掛けられた写真には遠い故郷の村が見える。

「私の田舎は言うなれば僻地です。ホイ(オルミエ湖から約25キロ北に位置する都市)からさらに山中を車に揺られて数時間かかる。貧しい村だ……しかし私は故郷を誇りにしている。テヘランで一旗揚げたら、故郷に報いるべきだと、私は考えていますよ。」

これもひとつの美学である。

◆◆◆◆ ◆◆◆◆ **さっぱり処分** ◆◆◆◆ ◆◆◆◆

テヘランに1人の資産家がいた。イラン北部の広大な農園と別荘、半世紀ほど前にイタリア人建築家に建てさせたというテヘランの高級住宅地にある瀟洒な邸宅、数々の書画・骨董、そしてテヘラン一等地の店舗と写真スタジオ。これらが、彼の死去とともにその5人の子どもたちに相続されたのが1年ほど前である。財産の整理のために米国在住の長男が帰郷し、音信不通だった次男は弁護士をよこした。5人が育った家は売却されて取り壊された。長女は寡婦となった母と小さな家を買ひ、そのうち2人で外国に移住する計画という。動産は各自が取り分を取った。農園は広大な面積があったので、土地を相当分に割ってそれぞれが相続した。亡くなった資産家の本職は写真撮影であったが、彼は自分の息子たちにこれを積極的に継承するつもりはなかったらしく、それでも当初写真スタジオを継いでも良いと言っていた三男が気を変えて渡英すると言い出したので、最後には店舗(のサルゴフリー)も売られることに決まった。

結婚して自分の家庭がある次女はあたかも蚊帳の外に置かれたかのようにだこぼした。女子の相続分が男子の2分の1と定められたイラン民法の規定(第907条)に対する憤懣もさること

ながら、亡き父の写真スタジオをこれまでずっと手伝い、写真技術を磨いて店を盛り立ててきたのは他ならぬ自分である、という自負が父の死によって消し飛んだことが、彼女をすっかり落胆させた。

「父はあれほど私を頼りにしていたくせに、娘に店を遺すという発想は露ほどもなかったの。」

写真スタジオがなくなった今、次女はカメラと撮影の腕前をもてあましている。

「父の教えや写真の技術は、私が誰よりも受け継いだのに、当の父がそれを見ないふりをしていた。他の家族は父からお金しか受け継がなかったわ。」

その父は一代でたいへんな資産を築いた人であったが、相続を機にかたちある財産はほとんどすべてが現金のかたちで分割され、唯一、邸宅が建っていた路地に彼の苗字が冠されている

ことが、文字どおりの名残となった。

それぞれの取り分をもらって四散する家族の後ろ姿を眺めながら、次女は「私が相続した分の父の農園は売らないわ。父のしたことが少しでも残ってほしいから」とつぶやいた。次女の父に対する思慕と失望を置き去りにしつつも、遺産はきれいさっぱり整理がついた。故人に、憂いはないのかも知れない。

莫大な財産であればあるほど、上手く「遺す」ことは存外難しい。稼業までをそっくり継がせるか、世のため人のために尽くすか、はたまた現金化して分割させるか……もちろん遺産相続などさしたる問題にならない庶民には贅沢な悩みであるには違いないが、テヘランの事業家たちの残照録は、相続問題をめぐって悲喜こもごもである。

(いわさき ようこ / 地域研究センター)